【授業科目】生理機能検査学Ⅲ　Laboratory Clinical Physiology Ⅲ

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
榎本 喜彦	2 年次 後 期	必 修	1	15	講義	あり	巻末 掲載	可

授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法	授業概要／生理機能検査学Ⅲでは、神経・筋機能検査のほか、運動誘発電位検査、体性感覚誘導電位検査およびこれらの測定に使用される針電極を含む電極装脱着法、および、手術室での術中検査として実施されることを考慮し、術中の検査法や、清潔不潔の定義など感染対策についても教授する。また、感覚機能（味覚・嗅覚・聴覚）検査、平衡機能検査、眼振検査、眼底検査、その他の神経系機能検査の意義、限界等について教授する。感覚検査は患者心理や体位が検査結果を左右するため、患者接遇についても講義する。 課題に対するﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ方法／2回行う中間試験への解答にコメントをつけて返却する。
実務経験に関する 授業内容	臨床検査技師として臨床経験を持つ教員が、検査の意義、原理、検査法などについて説明し、さらに異常結果の評価と各種病態との関連について説明する。
授業の 位置づけ	本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。
到達目標 (履修者が到達 すべき目標)	①めまいと眼振検査・平衡機能検査・眼振検査について説明できる。 ②聴覚検査について説明できる。 ③嗅覚・味覚検査について説明できる。 ④筋電図、針電極の測定法・波形の特徴について説明できる。 ⑤運動誘発電位検査、体性感覚誘発電位について説明できる
時間外学習に 必要な学修内容 および学習上の助言	第1回～第8回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく／範囲内の教科書は読んでおく／分からない用語については調べておく［最近では、一部の感染症の症状としてクローズアップされている］（各30分） 第1回～第8回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／復習のための課題を課すことがある（各30分） ※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（２単位15回科目の場合：予習+復習４時間／1回）（１単位15回科目の場合：予習+復習1時間／１回）（１単位８回科目の場合：予習+復習４時間／１回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。
授業計画	第 1 回　平衡機能障害（めまい）、静的平衡機能検査と動的平衡機能検査 第 2 回　眼振検査 眼振の発現機序と特徴、電気眼振図（ENG） 第 3 回　聴覚検査、味覚・嗅覚検査、中間試験 第 4 回　筋電図を学ぶための生理的基礎事項 第 5 回　誘発筋電図検査の臨床的意義および正常・異常所見 第 6 回　末梢神経の病態の軸索変性か脱髄かの判断法および症例解析 第 7 回　針筋電図検査の臨床的意義および正常・異常所見 第 8 回　神経原性、筋原性病変の判断法および症例解析、中間試験 全て榎本
評価方法 評価基準	成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 2回の中間試験50%、学期末試験50%、　授業態度を加味する
教科書	東條尚子、川良徳弘編 『臨床検査学講座 生理機能検査学』 医歯薬出版株式会社 (1年後学期「生理機能検査学Ⅰ」で使用したものを使用)
参考書等	『病気がみえるvol.7 脳・神経』 メディックメディア
学生への メッセージ	患者さんに直接接する検査である生理機能検査は、近年需要が増大している。臨床現場の話も含めながら講義を進めていきます。積極的に学んでください。生理機能検査学Ⅲは特殊感覚、体性感覚の検査で、いわゆる脳・神経系の検査です。内科や外科だけでなく、感情による影響が強く表れ領域なので心療内科や精神科の領域でもあり、興味のある分野だと思います。